

Title	旧体制の下で : チャールズ・W・チェスナット『杉に隠れた家』第18章の役割
Author(s)	里内, 克巳
Citation	言語文化研究. 2009, 35, p. 55-72
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9341
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

旧体制の下で

—— チャールズ・W・チェスナット『杉に隠れた家』第18章の役割 ——

里 内 克 巳

This paper takes a fresh look at *The House Behind the Cedars* (1900) written by Charles W. Chesnutt, a novelist of African-American descent. Placed at the very center of this historical romance with its diptych-like structure, Chapter 18 has been considered to be a mere interlude and has received less critical attention. However, when we take a closer look at the way in which the narrator describes the three seemingly minor characters in this chapter, its status as the novel's thematic center becomes apparent. By reading the entire novel from this perspective, we can also recognize Chesnutt's indirect attempt to depict a rather unconventional relationship between the middle-class “white” heroine and the working-class black man. Under the influence of the progressive Southern writer George W. Cable, Chesnutt thus tried to present a humanistic vision of race, thereby challenging the prejudiced racial understanding prevalent in those times.

キーワード：チェスナット，人種，世紀転換期アメリカ

1. 未来のアメリカ人

アフリカ系アメリカ人が人間らしく生きる正当な権利を奪われ、貧困と暴力のただなかで耐え忍ぶことを余儀なくされた19-20世紀転換期に、黒人の出自を持つ文学者が広く社会に認知されるのはきわめて難しかった。もちろん、Frances E. W. Harperをはじめとする黒人女性作家たちの活躍は、忘れられてはならない。だが、そうした女性作家たちを職業的な小説家と呼ぶにはやや無理があるだろう。たとえば詩を書くことから出発したハーパーは、近年発見された“Minnie's Sacrifice”のような習作を除き、長編小説は最晩年に*Iola Leroy* (1892年)を発表しただけである。またこの小説は、黒人の社会的な向上という目的意識を強烈に押し出した、いわゆる「抗議小説」的色彩を強く持っている。そのような社会意識があるからといって文学作品としての価値が減じると考えるのは狭量だが、こうした政治小説が、主流である白人読者層に強くアピールしなかったこともまた事実なのである。

本稿で取り上げるCharles Waddell Chesnuttは、そのような難しい状況の中で主流の読者

にも好意的に迎え入れられた、数少ない黒人男性作家のひとりである。1858年、オハイオ州Clevelandで生まれたチェスナットは、南北戦争終了後、両親がもともと住んでいたノース・カロライナ州Fayettevilleに戻って少年期を過ごした。その後、再び北部に戻って法律を学び、速記者として働き始めるのだが、幼い頃から親しんできた文学への情熱は止みがたく、作家として身を立てることを目指して文筆活動を開始する。1887年の“The Goophered Grapevine”は、元奴隷の黒人Uncle Juliusが、南北戦争前の南部で起きた超自然な出来事を、北部からやってきた若い白人夫婦に語って聞かせるという短編連作の第一作であるが、これが権威ある雑誌『アトランティック・マンスリー』に掲載されたことで、チェスナットは小説家として大きく飛躍する。短編集二冊が1899年に大手出版社Houghton Mifflinより出版された後、*The House Behind the Cedars* (1900年)、*The Marrow of Tradition* (1901年)、*The Colonel's Dream* (1905年)といった長編小説が立て続けに上梓された。ちょうど世紀の変わり目に、チェスナットは小説家としてのピークを迎えたことになる。多くの黒人作家がアメリカ合衆国の文学シーンの前面に躍り出るのは、1920年代のハーレム・ルネサンスを待たなければならないが、そのような黒人文学者たちの活躍する礎を築いた先駆的存在として、チェスナットはきわめて重要な作家なのである。

だが、同時代のハーバーや、後年のハーレム・ルネサンスの書き手たちと並べてみると、チェスナットの小説にはある独自性がある。他の作家たちが「黒人」という人種的カテゴリーを所与のものとして受け入れ、そのアイデンティティを強力に押し出すことによって主流社会への異議申し立てを行う傾向があるのに対して、チェスナットはしばしば、「黒人」「白人」という人種的切り分け自体の流動性・無効性に目を向けようとするのである。たとえば1900年に発表された“The Future American”という有名な評論がある。このなかでチェスナットは、これからの合衆国においては様々なヨーロッパ的要素の融合という形ではなく、白人・黒人・先住民の間でより大規模な人種融合(racial amalgamation)が進むだろうという展望を示している。先住民の場合に比べると、黒人の肌の色に対する偏見がまだ強力であるため、人種融合が急速に進展することはないかもしれない。しかしながら、黒人の社会的な地位の向上が進み、異人種間結婚への反発が弱まっていくにつれて、そのプロセスは着実に進んでいくだろう、というのである。

斜め読みすると「未来のアメリカ人」は、主流白人社会に黒人が一方的に同化されていくことを、奨励している印象を与えかねない評論である。黒人たちのなかで、顔を白くし、髪をまっすぐにする薬剤がはやる風潮を好意的に紹介するような記述などは、黒人のアイデンティティ・ポリティックスを重視する立場からは、きわめて迎合的であると受け取られるにちがいない。¹⁾しかしこの評論におけるチェスナットの主張のポイントは、黒人が白人社会のなかに単純に取り込まれ、消えていくことではない。人種融合によって「黒人」というカテゴリーが消滅するとまったく同時に、「白人」というカテゴリーも消える。それこそが、平和で安定した文明社会を築き上げるための条件なのだ、彼は考えて

1) Werner Sollors, ed. *Charles W. Chesnut: Stories, Novels, and Essays* (Library of America, 2002) p.861.

いる。このような考えは、黒人社会が知識人の下に結束し、白人主流社会と並び立つべきだと主張する*The Souls of Black Folk* (1903年)のW.E.B. Du Boisとはかなり異なるヴィジョンだ。だが、人種融合が世界的な規模で進みつつある21世紀の視点から見れば、白人・黒人間の差異を前提にしつつ両者の和解と融和を模索するデュボイスよりも、人種のカテゴリーそれ自体の孕む問題性を見据えようとするチェスナットの方が、より先鋭的であるという見方もできるのである。

チェスナットが人種的な切り分けの「ゆらぎ」に焦点を当てようとするのは、この作家自身がいわゆる「黒人の血」を16分の1しか持たない混血の黒人作家であるという個人的なバックグラウンドが大きく与っている。自分と同じ混血の男女に光を当て、そうした人々の抱く希望や苦悩を描き出す試みは、短編集 *The Wife of His Youth and Other Stories of the Color Line* (1899年)に収められた大半の作品においてもなされていた。だが、混血性が暴き出す「人種」の問題性へのチェスナットの姿勢が最も本格的に表明されるのは、評論「未来のアメリカ人」と同年の1900年に発表された長編 *The House Behind the Cedars* ——以下、『杉に隠れた家』という仮の訳題を使う——においてである。本稿では、これまであまり重視されなかった構成上の特徴を手掛かりとして、この小説作品にアプローチし、「人種」「階級」といった問題を処理する際のチェスナットの独自性を明らかにしてみたい。²⁾

2. 二段構えのロマンス

『杉に隠れた家』は、「黒人の血」をひいてはいるが見た目は白人と変わらない若い女性、Rena Waldenを主人公とする。主な舞台は、南北戦争が終わって数年後の、ノース・カロライナ州にあるPatesvilleという小さな町。周囲を杉の木に囲まれた古い屋敷にひっそりと暮らすリーナと母Mollyの元に、長い間姿をくらませていた兄のJohnが人目を避けて訪ねてくる場面から物語は始まる。ジョンも見た目は白人と変わらない混血であるが、素性を隠してサウス・カロライナ州のClarenceに移り住み、南北戦争の混乱に乗じて広大な屋敷を手に入れ、弁護士として成功を収めていたのである。自分と同じように混血としての出自を隠し、豊かな生活を手に入れようと兄に誘われたリーナは、明らかに「黒人」であると分かる混血の母を残して、ペイツヴィルを離れることになる。サウス・カロライナで教養と優美さをたちまち身につけたリーナは、George Tryonという若い白人男性に見初められ、結婚の約束をする。しかし、母モリーが容態を悪くしたという報せを受け取ったリーナが、単身ペイツヴィルに戻ったことがきっかけで、素性がトライオンに知られてしまう。リーナが精神的なショックのため倒れ、トライオンが婚約解消の手紙をジョンに送りつけるところで、物語は一段落する(17章)。その後、精神的打撃から回復したリーナは、「白人」として生きることをあきらめ、学校教師として黒人の子供たちの教育に身を捧げようとする。だが、彼女を学校に迎え入れた混血男性Jeff Wainが執拗につきまとうようになり、そ

2) *The House Behind the Cedars* のテキストは、Donald B. Gibson編のPenguin Twentieth-Century Classics版(1993)を使用する。本文の括弧内の数字はすべてこの版によるものである。

の後ろ暗い過去を知ったリーナは、ウェインと二人きりになることを恐れて煩悶する。一方、婚約を解消したトライオンも、リーナへの思いを完全に断ち切ることができずに、彼女に再び接近しようとする。後を追う二人の男を共に拒んで逃げ出し、半狂乱で夜の森を彷徨したリーナは力尽きて倒れ、ペイツヴィルの母の家に運ばれて息を引き取る。これが『杉に隠れた家』の結末である(33章)。

以上のような粗筋からも分かるように、『杉に隠れた家』は、リーナが白人社会に参入して成功を収めようとする前半部と、黒人社会のなかで自立して生きようと奮闘する後半部に、プロットがきれいに分割されている。この小説が二段構えになっていることは、ジャンルという観点からも指摘できるだろう。物語前半部は、黒人の出自を持った主人公が白人として主流社会のなかで生きていこうとする、いわゆる「パッシング(passing)」小説になっている。同時に、混血であることが露見したヒロインが幸福の絶頂から悲嘆のどん底に突き落とされるという、「悲劇の混血女性(tragic octoroon)」と呼ばれる大衆ロマンスの常套を踏まえてもいる。それに対して物語後半部は、リーナが白人男性トライオンと、社会的な約束事を反故にする犠牲を払っても結ばれるのか、あるいは人格的に怪しげな混血男性ウェインによって性的に蹂躪されることになるのか、といった興味で読み手を牽引していこうとする。二つの可能性は共に最終的に閉ざされることになるのだが、このような後半部の物語は、批評家Leslie Fiedlerがアメリカ小説のひとつの有力な源泉として指摘する「誘惑小説(seduction novel)」の系列に明らかに属している。³⁾

このような構成上の特徴は、ひとつには、『杉に隠れた家』を完成させるまでにチェスナットが経なければならなかった曲折を反映していると解釈できる。彼は、黒人社会に生きる混血女性「リーナ・ウォルデン」を主人公にした物語の草稿に、1880年代後半という早い段階から取り組んでいた。それとは別に、“Mandy Oxendine”と題する混血女性のパッシングを主題にした中編小説をチェスナットは書き上げたのだが、1897年、出版社フートン・ミフリンに発表を拒まれてしまう。1900年に出版された『杉に隠れた家』には、そうした二つの異なる未発表の物語が、形を変えて流し込まれている。大雑把に言うと、「リーナ・ウォルデン」草稿で使われたプロットは長編小説の後半部で、そして「マンディ・オクセンダイン」のそれは前半部で、それぞれ活用されることになったのである。

そうした創作上の経緯を考慮すると、出来上がった小説が、プロットの点でもジャンルの点でも二分されているのは必然の成行きではある。しかしチェスナットが、二つの異なる物語をより融合させるのではなく、意図的に分離を際立たせようとした節があることは注意すべきである。たとえば、前半部の実質的な締めくくりとなる第16章“The Bottom Falls Out”には、出自が発覚したショックで倒れたリーナが、母のいる「杉に隠れた家」に運ばれ、そこにトライオンが馬車に乗って様子を窺いに来る場面がある。

3) Leslie Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (1966)の第3章“Richardson and the Tragedy of Seduction”および第4章“The Bourgeois Sentimental Novel and the Female Audience”を参照。

Before the gate stood a horse and buggy, which Tryon thought as Dr. Green's. He leaned forward and addressed the driver.

“Can you tell me who lives there?” Tryon asked, pointing to the house.

“A cullud 'oman, suh,” the man replied, touching his hat. “Mis' Molly Walden an' her daughter Rena.” (98-99)

一方、小説の最後は、やはりトライオンがリーナを追って、「杉に隠れた家」に馬車で駆けつける場面で締めくくられる。

Just as the buggy reached the gate in front of the house behind the cedars, a woman was tying a piece of crape upon the door-knob. Pale with apprehension, Tryon sat as if petrified, until a tall, side-whiskered mulatto came down the garden walk to the front gate.

“Who's dead?” demanded Tryon hoarsely, scarcely recognizing his own voice.

“A young cullud 'oman, suh,” answered Homer Pettifoot, touching his hat, “Mis' Molly Walden's daughter Rena.” (195)

並べてみると、ほとんど同じ出来事が繰り返されていることが分かる。いずれの場合も、トライオンがリーナを追って「杉に隠れた家」に馬車で乗りつける。彼は家のなかに足を踏み入れることはない。ただ、そこに住んでいるのが混血の母娘(“cullud 'oman”)であると、身分の低い第三者から教えられるのみである。(帽子に手をやって目上の相手に敬意を示すしぐさが、二つの引用には共に書き込まれている。)したがって物語前半部も後半部も、トライオンとリーナの間に厳然と立ちはだかる「人種」と「階級」の壁を、読み手に強く印象づけることで締めくくりとしている。チェスナットが、第1章から最終章まで直線的に進行していく物語としてこの小説を構想したのではなく、いわば二枚折りの絵画(diptych)のように、差異を孕みながらも基本的には同じ物語を並列させることを意図していたことが推測できる。そのような観点から眺めてみると、いかにも古めかしいメロドラマの体裁をとった『杉に隠れた家』は、小説の様式性にきわめて意識的な実験作なのである。

3. 小説の「特異点」

『杉に隠れた家』は、二つの物語が並置された構成になっている。一方の物語では、白人社会に生きるリーナが描かれ、他方では黒人社会に生きるリーナが描かれるのだが、いずれの場合も彼女は幸福をつかみ損ねて挫折してしまう。「豊かな白人」と「貧しい黒人」という、明暗がくっきりと分かれたアメリカ社会の狭間で宙ぶらりんになった混血の人々の苦境が、二分された作品の構成にも意識的に反映されている。そのように考えるならば、小説のちょうど中間に置かれた第18章“Under the Old Regime”は、これまで考えら

れてきた以上に重要な役割を果たす章ではないだろうか。前半部の物語が終了した直後に挿入される、この「旧体制の下で」の章は、ショックで床に臥すリーナが回復する間に語られるという体裁をとった、一種の幕間である。そこで語り手は物語の時間を遡り、旧体制すなわち奴隷制が敷かれていた頃にペイツヴィルで、そして「杉に隠れた家」で、いかなる出来事があったのかを開示することになる。したがって「旧体制の下で」は、前半・後半いずれの物語にも属することのない、小説の特異点とでも言うべき章なのである。

不思議なことに、この18章は、『杉に隠れた家』批評史においてほとんど論及されることのない一種の盲点となっている。同じように物語の時間を遡る趣向は、先述したハーバーの『アイオラ・リロイ』にもあるので、チェスナットがこの黒人作家の先達に学んだであろうという推定も、あるいは可能であるかもしれない。しかしながら、『アイオラ・リロイ』のフラッシュバックは作品のかなり手前で行われており、狙い定めたように中央部に挿入する『杉に隠れた家』とは質的に異なるのではないか。ともあれ、今までのところ18章に関する別の、そして最も立ち入った考察は、近年におけるチェスナット再評価に大きく貢献したWilliam L. Andrewsが、1980年に出版した研究書のなかにもみ見いだすことができる。

アンドリュースは、先に述べた小説の二部構成を指摘したうえで、その中央に位置する18章に関して以下のように論じている。

Chesnutt's review of the life of Molly Walden is given in Chapter 18 primarily to clarify the circumstances from which her children sprang. In this retrospective narrative interlude, the younger Waldens' goals in passing for white can be measured against the opportunities of remaining "black" as their mother had experienced those opportunities. Chesnutt also recounts Molly's youth to place the entire matter of the situation of the mixed-blood class in the South in more dispassionate perspective.⁴⁾

このように18章を、リーナの母モリー・ウォルデンを主軸に据えた物語であるとする見方は、それなりに当を得ている。というのも、「旧体制の下で」の章がまず明らかにするのは、モリーという女性の出自、ならびに彼女が「杉に隠れた家」に住むようになった経緯なのだから。ノース・カロライナでは、奴隷制が敷かれていた頃であっても1830年代あたりまでは、選挙権をはじめとする社会的地位が自由黒人に保証されていた。混血の自由黒人でありながらある程度の資産に恵まれていたモリーの父親は、しかしある失態が原因で財産を失い、家族を貧窮に追いやった果てにこの世を去る。その後、まだ美しい少女であったモリーをある裕福な白人紳士が偶然に見初めたことがきっかけで、二人は性的な関係を取り結ぶ。この二人の関係は異人種間交渉(miscegenation)と見なされ、表向きには認知さ

4) William L. Andrews, *The Literary Career of Charles Chesnutt* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1980) p.169.

れないものなので、モリーは妾・愛人のような立場に甘んじざるを得ない。だがその代わりに彼女は、この紳士の保護下に置かれ、「杉に隠れた家」で不自由な生活を享受することができるようになった。この二人の間に生まれた非嫡出の子供たちが、小説の主筋でクローズアップされるジョンとリーナの兄妹である。しかし南北戦争の数年前、リーナがまだ幼い少女であった頃に、父親である白人紳士は死亡する。それ以降モリーと子供たちは、遺された「杉に隠れた家」をたよりとして、つましい生活を営んでいくことになる(104-7)。

興味深いことに、ここで提示されているヴィジョンは、奴隷制が撤廃された現在の状態に比べて、南北戦争前は黒人の出自を持った人々はより過酷な生活を強いられていた、といったお定まりの歴史観とはやや異なったものなのである。戦争の前には羽振りのよい生活ができたモリーは、戦後になって豊かさから転落し、周囲の黒人たちとあまり変わらない暮らしを余儀なくされるのだから。加えて、ここで描かれる「旧体制」における人種関係は、白人が黒人を容赦なく差別し暴力を加えるといった類のものではない。白人紳士とモリーの関係が、純粋な情愛を優先したものなのか、混血女性の肉体を白人男性が金で買うといった契約の部分が先に立っているのかは、語り手はつまびらかにしない。だがいずれにせよ、この二人の男女の描き方は、Mark Twainや後年のWilliam Faulknerなど主流の白人作家が描いてきた禍々しい禁忌としての異人種間交渉とはかけ離れた、穏やかなものである。好意的な見方をするならば、件の白人紳士は、アメリカ社会の経済的な豊かさの分け前を、混血女性モリーに気前よく差し出してあげたとも言える。したがって、家庭というトポスに隠喩化された黒人社会として「杉に隠れた家」を捉えるような読み方は、やや単純にすぎる。18章のモリーをめぐる物語は、この家が、主流白人社会への対抗的な場であるよりも、むしろ白人や黒人といった人種の垣根を越えて、人々が経済的・文化的豊かさを共有しうる場であることを明らかにしているのである。⁵⁾

もちろんそのような肯定的な見方は、「杉に隠れた家」のある時期における一側面を捉えているだけにすぎないことは言うまでもない。白人紳士がこの世を去り、ほぼ同時に黒人奴隷たちに法的なレベルでの解放がもたらされた時、逆にモリーと子供たちは経済的・精神的な支柱を失って転落してしまうからだ。小説のメインプロットが展開する南北戦争後の時代においては、この家はユートピアどころか、むしろモリーとその子供たちを閉じ込めている牢獄のような場と化しているのである。

「杉に隠れた家」のこのような複雑な性格規定は、メインストーリーに描かれた恋愛ロマンスに歴史的な奥行きを与える役割を果たしている。なぜなら、「旧体制の下で」の章を通過したうえで小説後半部へと読み進めていくなれば、リーナと白人男性トライオンとの関係に、母モリーと白人紳士との関わりを重ね合わせないわけにはいなくなるのだから。奴隷制が撤廃された新しい時代において、「人種」を異にする男女の関係は、昔とは違うものになるのか、あるいは基本的に変わらないのか。そんな問題に、作者チェスナッ

5) 「杉に隠れた家」に異人種間の絆を見る類似の解釈として、ユダヤ人改宗の文学伝統と重ねてこの小説を読み解こうとする Stacy Margolis, *The Public Life of Privacy in Nineteenth-Century American Literature* (Durham: Duke University Press, 2005) pp.110-11 を参照。

トが小説を書くことを通じて思いを巡らせ、また読者にもそれについて考えさせようとしているのは明らかだ。

19章以降の物語後半部は、「黒人の血」を忌むべきものとする白人優越主義に囚われているトライオンが、そのような考えから脱却してリーナと結ばれるか、という興味が焦点となる。「黒人」であるリーナに欺かれたという憤激と、彼女に抗いようもなく惹きつけられる気持ち。その間で激しく揺れ動くトライオンは、最終的に、社会が定める慣習を踏みじってでもリーナと結ばれようと思ひ定め、“Custom was tyranny. Love was the only law.” (194)と考える境地に辿り着く。ここで彼がリーナに抱く「愛」の自覚の描写には、アイロニカルな読み方を拒絶する真摯さが含まれているようであり、「人種」という束縛を超えた人間的な絆を二人の男女が育むことへの可能性が、わずかに指し示されている。とはいえ、周囲の影響を受けやすく衝動的な(“impressionable and impulsive”151)性格を持つとされるトライオンが、リーナに抱く過剰に自己犠牲的な感情に、軽はずみなニュアンスが終始つきまとうのは気になるところだ。最後の最後になってトライオンが「黒人の血」への偏見を完全に払拭した、と考えることには慎重にならざるをえないし、純粋な「愛」だと感じる彼のリーナへの感情に、盲目的な欲情が絡みついている可能性もなお残されている。

とすれば、メインストーリーで描かれる新時代の男女の「愛」は、奴隷制の下で密やかに営まれた一世代前のそれと比べて、いかほどに自由なものであるだろうか。リーナを追ってトライオンが「杉に隠れた家」へと駆けつける終幕部は、18章と重ねて読むと、リーナの母モリーが白人紳士と結んだ関係と同じようなものを、トライオンとリーナも結ぶことになるのか、と読者に漠と予感させる。だが、その関係が欲情を剥き出しにしたものに墮してしまうのか、お互いを慈しむような形へと昇華するのかを見極める前に、リーナは死に、彼女が臨終を迎える場にトライオンは足を踏み入れることなく終わる。チェスナットは、「過去」と「現在」という二つの世代それぞれの男女の結びつきを重ね合わせながらも、その優劣を比較することを保留してしまうのである。

こうした宙ぶらりんの結末をチェスナットが選択したのは、ひとつには、白人紳士がモリーとかつて取り交わした「異人種」間の関係を、南北戦争後という違った時代背景の下で描き直すことの困難さが大いに関わっているのだろう。二人が結ばれる結末が現実味を失うほどに、アメリカ社会はその種の関係に非寛容になっていたのである。作品の受容という側面から、この点を更に掘り下げて考えてみることもできる。この小説を読んだ主流の白人読者は、トライオンと同じような人種主義的イデオロギーを多少なりとも共有していたはずである。そのような読者にとって、リーナとトライオンが結ばれるような(すなわち「異人種間交渉」をよしとするような)結末は、おそらくは刺激的なものでありすぎただろう。したがってチェスナットは、そのような結末へとプロットを向かわせながらも、恋愛を成就させることは慎重に回避せざるを得なかったのである。その意味でこの結末は、

作品の（と言うよりも、作品の書かれた世紀転換期の）限界を露呈するものではある。ただし同時にこの結末は、トライオンとリーナとの間に厳然とした壁が横たわり、それは一世代前の白人紳士とモリーとの間のそれよりも融通のきかないものであることを、くつきりと浮かび上がらせている。不条理な人種の線引きに基づいた格差の壁が、南北戦争終結と共に崩れるどころか、逆に小説が書かれた世紀の変わり目に至るまで着実に強固なものになっている。18章と小説後半部とを重ねて読むと、そんな作者の現状認識を読み取ることができるのである。

4. もうひとつのパッシング

たしかに18章のモリー・ウォルデンをめぐる物語は、小説全体のヒロインである娘リーナの恋愛ロマンスの一種の雛形として機能する。とはいえアンドリュースのように、「旧体制の下で」がモリーを主軸にした章であるとのみ規定してしまうのは、大いに問題がある。というのも、モリーを中心に話が進められるのは、この章の最初の部分に限られ、その後は話題が彼女からは完全に離れてしまうからだ。次に語り手が注意を向けていくのは、モリーの息子ジョンであり、彼がいかにしてパッシングをするに至ったのか、という物語前半部では明かされなかった疑問がそこでは埋められていく。しかも話はそこで終わらず、次には、「杉に隠れた家」の隣に住んでいるFowler一家、特にその息子のFrankへと焦点が移動していくのである。目のつんだ文体で語られるこの18章は、クロノロジカルに話が進められる「物語」というよりも、モリー、ジョン、そしてフランクという順番で次々にスポットライトが当てられていく、「人物スケッチ」集成であるという側面が実は強い。『杉に隠れた家』という小説全体がその二段構えの構成によって、単線的な読み方を拒む側面があるのと同様に、中央に置かれた18章もまた、直線的な語りを拒否している。そこで、モリー以外に光を当てられている人物に目を移したとき、小説がどのような様相を示すかを以下に検討していくことにしよう。

小説の冒頭部から登場し、リーナを「杉に隠れた家」からサウス・カロライナの豊かな暮らしへと連れ出す兄のジョンが、物語前半部の重要な登場人物であることは衆目の一致するところであろうが、メインストーリーだけを読むならば、彼の人物像は謎めいたブラグマティスト以上の域を出るものではない。そもそも作者は、物語の出だしからいきなり人種絡みの「パッシング」物語としての体裁を押し出すようなことはせず、兄妹が貧しさから這いあがる成功物語としての側面をまずは前面に出す。この小説において、「人種」と「階級」は同じコインの両面のようにびたりと貼りついているのだが、語り手はその片面だけを読者に指し示し、ジョンとリーナが実は混血であることが、後になって了解されるよう工夫している。したがって語り手がジョンの内面に仔細に立ち入りつつ、パッシングに至るまでの経緯を明かす記述は、物語前半部にはほとんどない。問題の「旧体制の下で」こそ、物語前半部で隠されていたコインの裏面が読者に正面から示される、いわば種

あかしの章なのである。

話は1855年、ジョンが15歳であった頃まで遡る(107)。白い肌を持つ彼は、「杉に隠れた家」にある父親の蔵書を読みふけり、家の外に広がる自由で豊かな世界に思いを馳せる少年だった。だが、遊び仲間の少年たちからは「黒人」と見なされ差別を受ける。やがて決意を胸に秘めたジョンは、ペイツヴィルに住むArchibald Straight判事のオフィスを訪れ、弁護士になりたいのだと打ち明ける。ストレイト判事は白人でありながら開明的な思想を持った人物であり、驚きながらもこの混血少年の相談に応じる。ノース・カロライナの法律に照らせば、見かけはどうあれ黒人の血をわずかでも持つ君は「黒人」だ。だが、法的な拘束がさほど厳格ではないサウス・カロライナに移り住むならば、その限りではない。そう助言した判事は、使い走りの仕事をさせるという名目でジョンを雇い入れる。秘密裏に判事の本を読むことを許された彼は、勉学を積み、18歳のときにペイツヴィルから姿を消す(115)。そのようなジョンのパッシングをめぐる前日譚が、「旧体制の下で」では披露されるのである。

このエピソードが重要なのは、「人種」カテゴリーの恣意性をめぐるチェスナットの考えが、小説のなかで最も明確に表明されている点にある。妹のリーナは、「黒人の血」をわずかであれ譲り受けている自分は「黒人」なのだ、という考えを前提にしてパッシングを行なう。彼女のそんな人種意識は、素性が露見した後も基本的に揺るがない。一方、兄のジョンは、たとえ混血であっても「白人の血」の方がより多いならば、「白人」としてのアイデンティティを与えられるのが筋ではないか、と考える。そうしたジョンの論理に対してストレイト判事も率直に、混血の人々を「黒人」に分類しておく方が社会の主流を成す白人たちにとって都合がいいだけだ、と答える。“Because it is more convenient as it is—and more profitable.”(113) 法によって定められた人種の線引きは、社会の中で力を振るう者たちの利益に合わせて作られた、恣意的なものにすぎない。この考え方は、「未来のアメリカ人」や、それに先立つ“What Is a White Man?” (1889年)といった評論で、チェスナット自身が展開してきた考えとも一致する。物語の前半部では謎に包まれた人物として描かれ、後半部になると完全に姿を消してしまうジョンではあるが、第18章において、ヒロインであるリーナではなく、彼に作者の代弁者としての位置が与えられていることは見逃されるべきではない。

またジョンのパッシングは、「法」と「慣習」の関係という、小説全体の主題とも密接に繋がっている。そもそも、ストレイト判事の助言をそのまま受け容れるならば、サウス・カロライナという異なる法体系を持つ州に移り住めば、法的なレベルでジョンはもう「白人」であり、混血であることを隠す必要はないはずだ。それにも拘わらず、やはり彼は自らの素性を隠し、パッシングを行わなければならなかったのである。法的な抜け道を利用し、かつ法律家にまでなったジョンが、なお世間の目を恐れて素性を隠さなければならぬ皮肉。この成行きは、彼が頼みとする「法」が「慣習」の前に無力であること、そして「慣習」

こそが社会を本当の意味で動かしている「法」に成り下がっていることを露呈させる。ここに、奴隷制が撤廃されて久しい世紀の変わり目に至っても、変わらず残り続ける人種偏見に対するチェスナットの厳しい認識を読み取ることが可能である。奴隷制下の南部の田舎町を舞台にしたマーク・トウェインの有名な*Pudd'nhead Wilson* (1893年)と同じく、いやそれ以上に、『杉に隠れた家』は「法と慣習のフィクション(“fiction of law and custom”)⁶⁾としての人種という主題を、深く掘り下げた作品なのである。

このようにジョンは、妹リーナを主軸とした物語だけでは必ずしも扱いきれない小説の中核的なメッセージを発信する役割を担わされている。ただし、リーナとジョンのパッシング観が異なるといっても、「白い肌の持ち主でなければ豊かさへの権利を手にはできない」という考えに囚われている点で両者が共通することは、ぜひとも認識しておかなければならない。ジョンが父親の本を読み、またストレイト判事の書物を盗み読むことで教養を身につけていく過程は、黒人奴隷でありながら禁じられていた読み書き能力を密かに習得して自由を得たことで知られる、実在の政治家Frederick Douglassと比較して考えてみるのが早道だろう。「ダグラス」の名前が、英国の文学者Walter Scottの作品から取られたのと同様に、ジョン・ウォルデンは英国の作家Bulwer-Lyttonの小説中の人物名であるWarwickという名前を借り受けてパッシングを行なう(20)。それゆえ、作者チェスナットがジョンの人物像を造形する際に、フレデリック・ダグラスを多分に意識していたことは想像に難くない。(チェスナットはダグラスの伝記を1899年に書いている。)しかしながらジョンの自己成型は、黒人も人間らしく生きる権利があるのだという意識に目覚めたダグラスとは、全く異なる方向に進展していくことには注意が必要だ。18章で紹介される白人紳士の蔵書は、“a man of catholic taste as well as of inquiring mind” (108)であるこの人物の人柄を偲ばせるラインナップになっていた。自由を表向きは標榜しつつも奴隷制に執着するような、南部白人の心性を反映した蔵書であったのだ。おそらくジョンはそのような本を読むことで、父親である白人紳士の考え方を内面化してしまった。だからこそ彼は、書物が開示する物質的にも文化的にも豊かな世界への憧れを募らせこそすれ、黒い肌を持っていればその世界に参入できない社会の不条理に対して、ダグラスのように異議申し立ては決してしないのである。そのことはジョンだけではなく、妹リーナも、母モリーも事情は変わらない。「杉に隠れた家」に集う登場人物たちは、今は亡き白人紳士になお呪縛されているかのように、肌の白さが階級的な上昇に繋がるという考えから抜け出すことができないでいる。そしてそれは、18章の最後でスポットライトが当てられる、黒い肌を持った人物に関しても同様である。

6) Mark Twain, *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*, Ed. Sidney E. Berger (New York: A Norton Critical Edition, 2005) p.9.

5. 世界の果てまで

若きフランク・ファウラーとその父Peterは、ペイツヴィルで桶作りにいそしむ職人である。特定の仕事に就かなくても自活できるモリー・ウォルデンとその子供たちとは明らかに階級を異にするこの父子は、「杉に隠れた家」の向かいに住み、ウォルデン一家と距離を置いた付き合いをしている。だが、父親のピーターが相当によそよそしい態度をとるのとは違って、息子のフランクは親身になって隣人の世話を焼こうとする。年齢の近いリーナにフランクはとりわけ深い愛着を持っている。彼女が素性を隠してペイツヴィルを去ってからは、独り暮らしになったモリーの面倒を見る合間にサウス・カロライナに赴き、リーナが安泰に暮らしている様子を密かに確認して胸をなでおろしたりする。そのようなフランクのリーナへの忠誠ぶりは、素性が発覚して彼女の人生が振り出しに戻ってしまった後も変わらない。「黒人教師」としてリーナが再びペイツヴィルを発った後、彼は悪い予感に襲われて彼女を探しに旅立つ。はたして人事不省で倒れていたリーナを見つけ出し、「杉に隠れた家」に連れ帰る役回りを果たすのはこのフランクなのである。

一読すると、物語の主筋の合間を縫うように現われては消えるこのフランク・ファウラーは、さして重要性を持たない端役的な人物であるように見える。先述した研究者のアンドリュースもそのような見解を取っており、以下のような意見を表明している。

Similarly, Frank Fowler is more a black-face refugee from popular melodrama than a realistically drawn black workman. The foil to Wain the seducer, Fowler plays the humble, loyal son of the soil whose love for Rena is as pure and steadfast as any sentimental reader could want. (168)

ここでアンドリュースは、フランクをやはり肌の色の黒い混血男性ジェフ・ウェインと同列に置き、両者ともに、メロドラマに典型的な黒人男性のステレオタイプ(“flimsy stick figures”168)に則って平板に、そして軽薄に描かれていると断じている。ウェインに関しては確かにそうであるかもしれない。しかし私は、フランクの人物像については全く異なる見解をとるのである。アンドリュースがフランクをこのようにしか捉えることができないのは、おそらくこの研究者が、モリーの物語とのみ18章を規定していることと大いに関係している。というのも、「旧体制の下で」の章で最終的に焦点が当てられるのは、実はファウラー一家であって、読者はそこで明かされることを基にして、物語全体におけるフランクの役割を捉え直すことを求められているのである。

18章で語り手は、ピーター・ファウラーとその妻Nancyが、白人紳士の命によって愛人モリーの世話をすべく住まわされた黒人奴隷であった、という過去の事実を明るみに出す。優秀な働き手であったピーターは、やがて辛抱強い儉約と労働によって、自分と妻、そして息子のフランクの自由を買い取り、「杉に隠れた家」の向かいに所帯を構えることができた(116)。南北戦争直後というメインストーリーの時点において、ウォルデン家と

ファウラー家の関係は名目の上では対等なものになっているわけだが、両家の間にぎこちない空気が流れているのは、そうした過去の事情が与っているからなのだ。モリーは隣人であるファウラー父子に頼みごとをすることはあっても、高圧的な態度はとらず、きわめて愛想よく接している。しかしピーターは、かつて実質的な女主人であったモリーが愛想良くすればするほど、そこに奴隷であった自分に対する優越意識を逆に読み取り、疎ましく思うてしまうのだ。(そして、そのようなピーターの解釈は、必ずしも独りよがりのものではない。) ピーターの苛立ちには、モリーの方が肌の色も明るく、それゆえに階級的にも高いところにいるという劣等意識も多分に含まれている。そんな彼にしてみれば、息子のフランクが自分とは逆に、モリーやリーナに対して献身的に振舞う姿を目にすると、もうあの一家に仕える奴隷でもあるまいしと、不愉快な気持ちになるのである。

それでは、こたわりなく隣人の母娘に接することのできるフランクは、父親であるピーターと違って、「旧体制」の桎梏から完全に自由になった若者であるかと言うと、必ずしもそうではない。18章には、まだ幼い子供同士であった頃に、分け隔てなく育てられていたリーナとフランクに起こったある事件が触れられている。父親の仕事場で遊んでいる最中に、フランクがリーナに小さな傷を負わせてしまい、それがきっかけでモリーは一時期、娘をフランクから引き離してしまうのである。以下はその事故が起こった時の描写である。

When Frank became old enough to go to work in the cooper shop, Rena, then six or seven, had often gone across to play among the clean white shavings. Once Frank, while learning the trade, had let slip a sharp steel tool, which flying toward Rena had grazed her arm and sent the red blood coursing along the white flesh and soaking the muslin sleeve. (117. 下線は引用者による)

ここでは、作業場のおがくずとリーナの肌が、「白さ」を媒介にして重なり合っている。そして、白い皮膚のうえを流れ、衣服を染めていく血の赤さには、微妙に性的なニュアンスも漂っている。このような描写は、少年フランクの内面において人種・階級・性という三重の強力な禁忌が出来上がってしまったことを暗示する。鋭い鉄の道具が、木材ではなく大切なリーナを傷つけてしまったこと。明るい肌を持ち、かつ階級的にも上の少女を、卑しい労働の道具で侵犯してしまったこと。そうした罪悪感が、以来フランクにとりついて離れなくなってしまうのである。リーナのなかに流れている「黒人の血」だけが彼女と自分を結ぶ紐帯であって、それゆえにこそ、自分はある程度だけ彼女に近づくことを許されているのだ、と思ひもするのである(87)。また同様に、リーナの側からこの出来事を考えてみても、彼女とフランクを分断する三重の障壁がやはりここで据えられたであろうことが、容易に推測できる。成人したフランクがどれほど献身的な態度を示しても、リーナにとって彼は、もはや恋愛の対象にならない「お友だち」でしかないのである。

アンドリュースが、フランク・ファウラーを平板なステレオタイプであると考えたのは、

このさりげない、だが決定的な場面を読み逃しているからに他ならない。フランクは、リーナにもしものことがあったなら、ラバとおんぼろの荷車を駆って、世界の果てまでも必ず迎えに行くと言う(27)ほど献身的な心情の持ち主であるが、そこには異性の相手に対して通常なら抱くであろう所有欲なり性的感情なりが完全に欠落している。何気無く読むと、そのような性格造型は滑稽かつ非現実的であり、白人に対してあくまで追従する黒人という同時代の差別的なステレオタイプに準拠しているだけだ、という印象を与えてしまう。しかし、そのような表層的な印象を与えることによって、人種主義に多少なりとも毒された白人読者の警戒心を解くことこそが、作者チェスナットの企みであったと逆に考えることができるのではないか。上述のエピソードがほのめかすのは、いかにしてフランクのリーナに対する、性的なものを全く含まない感情が出来上がったのかという経緯である。そこから立ち上がってくるフランク像は、差別的な戯画であるどころか、社会の規定する人種観と階級観に閉じ込められてはいるが、それでも血も涙も流すように描かれた人間なのである。

このようなフランクの人間性を視野に入れるならば、リーナを軸とするメインストーリーの恋愛ロマンスにおいて、彼が白人青年ジョージ・トライオンと対になるような存在であることが理解されてくる。そもそもトライオンが初めて読者に紹介されるのは、ウォルター・スコットの*Ivanhoe* (1819年)を模した馬上槍試合を描く第5章“*The Tournament*”においてである。この試合に参加したトライオンは観客席のリーナを初めて目にし、彼女が落としたハンカチを自分の槍に巻きつけることで、愛と忠誠を示す(34)。見事に栄冠を勝ち得たトライオンが、彼女を「愛と美の女王(*The Queen of Love and Beauty*)」に指名することで、二人の恋愛は進展していく。あからさまに劇的な形で表明されたトライオンの「騎士道精神」が、それ以降の彼とリーナの間を規定する。しかし、彼のなかに潜んでいた人種偏見が明るみに出されてからは、この「騎士道精神」はかなり皮肉な色合いで描き出されることになるのである。加えて、物語がかなり進展した地点から振り返ってみると、このロマンティックな馬上槍試合それ自体が、旧弊なものに固執する南部社会の保守性を体現するものとして、作者の批判的になっていたことも明瞭になる。マーク・トウェインが、「ウォルター・スコット病」にとりつかれたアメリカ南部を槍玉に挙げたことはあまりにも有名だが、まったく同様の批判をここでチェスナットも行なっているのである。

ところで、さりげない形であるが、フランクもこの馬上槍試合の場面に顔を出している。リーナが来ているだろうとあたりをつけて、観客席に座っていたのである。そこに、暴れた馬が踏みつけて折れた槍の破片が飛んできて、彼の頭に当たるというハプニングが起こる。

The flying fragment was dodged by those who saw it coming, but brought up with a resounding thwack against the head of a colored man in the second row, who stood watching the grand stand with an eager and curious gaze [...] Finding that the blow had drawn blood, the young man took

out a red bandana handkerchief and tied it around his head, meantime letting his eye roam over the faces in the grand stand, as though in search of some one that he expected or hoped to find there. (33-34)

「黒人」“a colored man”あるいは「若い男」“the young man”とだけ書かれている人物が、フランクであると判明するのはもう少し読み進めた時点である。一読するとこの記述は、いきなり頭にモノをぶつけられて周章狼狽する、滑稽で戯画的な黒人男性の描写であるという印象を与える。だが、この若者が実はフランクであることと、彼がリーナに対して向ける「忠誠心」を考慮に入れて読み直すならば、この描写を滑稽と形容するだけで済ませることが、はたしてできるだろうか。傷を負った自分の頭にフランクが巻きつける赤いハンカチは、トライオンが槍につけた白いハンカチと対になることによって、リーナに対するもうひとつの「騎士道精神」の所在を示すものとなっている。更には、飛んできた木片でフランクが負う傷——バンダナの赤い色は、傷口から出る血を強調するかのようだ——は、18章で開示される、飛んできた金属工具で若いリーナが負うあの傷へと接続していく。したがって、フランクがここで負う傷は偶然の産物ではあっても、過去にリーナに負わせたものと同じ傷を自らに与える、自罰行為としての意味を潜在的に持つ。もちろんそうだからといって、二人の関係がすぐさま修復されるわけでは全くない。物語の終盤に到っても彼がリーナに対して抱く感情が封印されたままであることは、偶然剥き出しになったリーナの腕に、過去の傷跡がまだ刻まれている描写(191-92)でさりげなく暗示される。結局のところ、馬上槍試合の会場での出来事が意味しているのは、リーナに対して果てしなく償い続ける誓約をフランクがあらためてした、ということなのである。

かくして『杉に隠れた家』においては、ジョージ・トライオンのリーナに対する「騎士道精神」の顛末が、彼自身の視点も借り受けつつ緻密に語られるのと平行するように、フランク・ファウラーの「騎士道精神」もさりげなく書き込まれていることになる。両者は必ずしも対極に位置するものではなく、共通の問題を抱えている。トライオンの「騎士道精神」に基づくリーナへの愛情は、旧南部の奴隷制に由来する人種偏見に染められており、その点で限界がある。それと同様に、フランクのリーナに対する「騎士道精神」も、かつての黒人奴隷が白人の主人に向けたとされる（あるいは向けざるをえなかった）無条件の忠誠とほとんど変わるところがないとも見える。そうではあっても、小説の終幕において、傷つき倒れ伏したリーナをフランクが抱き起こし、すすり泣きながら“Frank loves you better'n all the worl'” (192)と言う場面、そして臨終間近のリーナが彼に、“my good friend—my best friend—you loved me best of them all.” (195)とつぶやく場面に目を向けてみるならば、二人の男女の間を分断している封印もあるいは解けるのではないかと思わせる形で、作者チェスナットが物語を動かしていることが推察される。メロドラマでは常套の「愛(love)」という言葉が、ここでは存外の重みを持ち、輝きを放つ。そしてまた、トライオンがリー

ナを追いかけてペイツヴィルに来て、二度も繰り返して「杉に隠れた家」の戸口で踏み止まってしまうのとは対照的に、フランクはこの家に家族の一員であるかのように足を踏み入れ、最後にはリーナを看取る。この結末場面は先述のように、トライオンとリーナとの間に立ちはだかる「人種」と「階級」の壁を強調するのだが、視点を変えると、フランクとリーナとの間の壁の薄さを対比的に強調するような終わらせ方であるとも言える。もちろん同時代の読者は、見かけは白人と言ってもよいリーナのお相手として、この身分の低い黒人男性を視野に入れることなど思いもよらなかつただろう。作者もそれをよく心得ており、奴隷の主人への忠誠というヴェールでこの男女の組み合わせをくんでいる。だが「人種」や「階級」をめぐる先入観を取り払って見直したとき、二人の間に「愛」が育まれる可能性が浮かび上がってくるよう、チェスナットは慎重に筆を進めていたのである。

6. 「人種」から「人類」へ

近年チェスナット再評価の機運が高まるなかで、長編第1作である『杉に隠れた家』の位置づけは必ずしもまだ定まっていない。正面から人種対立を扱った激烈な社会小説『伝統の精粹』（1901年）の方が、最近はむしろ注目を浴びる傾向にある。あるいは、*The Conjure Woman* (1899年)のようなフォークロアの形式を借り受けた短編群が、「アフリカ系アメリカ文学」の枠によく馴染むものとして評価されたりする。彼が生前に発表した長編作品のなかでは、『杉に隠れた家』が最も売れ行きがよかった。しかしそのメロドラマティックで通俗的な体裁が逆に災いして、本格的な読み込みに値しない作品だという先入観をいまだに与えているくらいがある。⁷⁾ だが本稿で検討してきたように、『杉に隠れた家』は平板で粗雑な作りの小説では決してない。リーナ・ウォルデンの恋愛ロマンスという主筋の周辺にいる「脇役」たち——モリー、ジョン、そしてフランク——に焦点を当てて読むならば、この作品の肌理の細かさや奥行き、そして作者のアメリカ社会に対する認識が鮮明に見えてくる。南部社会が法的な平等を謳いながらも、奴隷制の時期と実質的には変わらない苛烈な人種偏見を温存させていること。人種の区分と一致するような階級格差が逆に強化されつつあること。そうした同時代の状況に対するチェスナットの批判意識を汲み取ることが、「脇役」たちに注目することで可能になる。作品中央部に置かれた18章「旧体制の下」は、そのような登場人物たちが集結する、『杉に隠れた家』の要となる部分である。ここにこそ、チェスナットの読み手への隠れたメッセージが集約されていると言っていい。

物語の途中で奴隷制の時代へと時間を逆行させる趣向において、このチェスナットの小説と黒人女性作家フランシス・ハーバー『アイオラ・リロイ』とが共通することは、既に触れた。なるほど二作品は共に、南北戦争の前と後の断絶より連続性を強調することによって、間接的に世紀転換期における人種問題に介入していこうとする試みであった。しかし、ちょうど中央部に作品の「核心」を楔のように打ち込むという『杉に隠れた家』のユ

7) 最も顕著な例を挙げると、Eric Sundquistの大著 *To Wake the Nations: Race in the Making of American Literature and Culture* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1993)は、そのほぼ4分の1がChesnuttに割かれているというのに、*The House Behind the Cedars*に関する論述はほとんど見当たらない。

ニークな布置は、George Washington Cableの長編小説*The Grandissimes* (1880年)の影響をより強く受けたものであると私は推定する。ケイブルはマーク・トウェインとの交友で有名なルイジアナ出身の文学者であり、白人南部作家としては例外的に黒人の権利を擁護する論陣を張ったことでも知られる。代表作『グランディシム一族』は、19世紀初頭のニューオーリンズを舞台にした恋愛ロマンスであるが、一見無害な地方色文学の体裁の下に、南北戦争後の南部の状況への批判を潜ませる政治性も備えている。その政治小説としての核心部は、18世紀末にアフリカからルイジアナに連れて来られた族長の運命を辿るエピソード「ブラ・クーペの物語(“The Story of Bras-Coupe”)」であり、この異色の挿話が『グランディシム一族』のちょうど中間に嵌め込まれているのである。⁸⁾

チェスナットは、この革新的な思想を持ったケイブルという作家と1880年代末に知り合い、以後交友を深めた。その影響がチェスナットの晩年にまで及んでいたであろうことは、ケイブルへのオマージュ作品であり19世紀初頭のニューオーリンズを舞台にした小説*Paul Marchand, F.M.C.*が、1921年に未発表ながら書かれたことでも窺える。チェスナットが『杉に隠れた家』の出版を準備していた1899年に、『グランディシム一族』は再版されている(その前は1890年)。⁹⁾ 出版されて20年近く経った世紀の変わり目にも、まだ読まれていた小説だったのだ。更に、1900年の評論「未来のアメリカ人」のなかにも、実はケイブルが顔を見せている。このなかでチェスナットは、ケイブルなどの小説のなかで扱われる「混血女性の悲劇」は必ずしも無根拠な空想の産物ではなく、歴史的な事実をそれなりに踏まえていると指摘したうえで、男性の混血児が文学作品のなかで登場することがあまりないことに違和感を表明している。¹⁰⁾ この論述は明らかに、同年に出版された『杉に隠れた家』でパッシングを行う、ジョンとリーナの兄妹を念頭に置いたものである。以上の諸点を考慮に入れるならば、この小説がケイブルの強力な影響下に書かれたことが無理なく推測できるのである。

19世紀末から20世紀初頭にかけての南部社会の現状をめぐる文学・政治上の議論に、ケイブルとチェスナットが相互交渉しつつ関わっていたという視角は、これまでほとんど言っていないほど検討されてこなかった。ケイブルはあくまでもトウェインとの絡みで引き合いに出されるばかりであり、一方のチェスナットは、「黒人文学」という狭い枠のなかにまだ閉じ込められているようである。チェスナット自身が批判のターゲットとした「白人」「黒人」という区分けに、現代の研究者もまた呪縛され、時代の全容を捉える事ができずにいるのではないだろうか。¹¹⁾

8) この挿話の*The Grandissimes*における中心性に関しては、ジョージ・ワシントン・ケイブル著、杉山直人・里内克巳共訳『グランディシム一族——クレオールたちのアメリカ南部』(東京:彩流社, 1999年)に所収の拙文「政治小説としての『グランディシム一族』——『ブラ・クーペの物語』を読み解く」において詳しく論じた(pp.364-72)。

9) Arlin Turner, *George W. Cable: A Biography* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1966) p.322.

10) Werner Sollors, ed. *Charles W. Chesnut: Stories, Novels, and Essays* (Library of America, 2002) p.851.

11) 重要な例外として、Brook Thomas, *American Literary Realism and the Failed Promise of Contract* (Berkeley: University of California Press, 1997) ch.7 “Charles W. Chesnut: Race and the Re-negotiation of the Federal Contract” pp.156-190を参照。Chesnutと19世紀末アメリカ文壇の大御所William Dean Howellsの作品を重ねて読む試みがなされている。

このような恣意的な「人種」のカテゴリー化を乗り越えるヴィジョンを指し示すことで、チェスナットは『杉に隠れた家』の18章を締めくくっている。

There are depth of fidelity and devotion in the negro heart that have never been fathomed or fully appreciated. Now and then in the kindlier phases of slavery these qualities were brightly conspicuous, and in them, if wisely appealed to, lies the strongest hope of amity between the two races whose destiny seems to bound up together in the Western world. Even a dumb brute can be won by kindness. Surely it were worth while to try some other weapon than scorn and contumely and hard words upon people of our common race,—the human race, which is bigger and broader than Celt or Saxon, barbarian or Greek, Jew or Gentile, black or white; for we are all children of a common Father, forget it as we may, and each one of us is in some measure his brother's keeper. (118. 下線は引用者による)

これは、フランクのリーナへの無私の献身に触れた直後の、語り手のコメントである。フランクのような「黒人」の内面には、今まで十分に理解されてこなかった思いやりの心があり、それは今よりも奴隷制ありし日においてこそ頻繁に発揮されるものであった、とする最初の部分は、現在の視点からすればむしろ問題を孕む。「黒人」という人種固有の特質があるとすると、この考えはいわゆる本質主義的である。単独に取り出して読むならば、旧南部の奴隷制を肯定しかねないような危うさがある。しかし慎重に読み進めると、チェスナットが強調したいことは実はその点にあるのではないことが、了解されてくる。下線を引いて示したように、「人種」を意味する“race”という言葉はやがて、より普遍的な「人類」「human race」という意味に変換されていく。フランクのリーナに対する思いやりの感情を、ある特定の「人種」に固有のものだと限定しないでほしい。むしろ、人種・民族・宗派といったかりそめの区分を超えて、より普遍的なレベルで「人類」が共存するための種子だと考えてほしい。そう語り手は示唆しているようなのだ。さりげない形ではあるが、ここにこそ『杉に隠れた家』でチェスナットが伝えようとしたことの核心がある。これはまた、変貌した21世紀に生きる私たちが、時代や国境の違いを越えて胸に刻むべきメッセージでもある。